

第48回全道造形教育研究大会

留萌大会特集





北海道 造形教育 連盟報

No. 107 1998.12.5 発行

発 行 北海道造形教育連盟

事務局 〒004-0845 札幌市清田区清田5条2丁目18-1 札幌市立清田南小学校 藤 井 正 治 ☎011-881-1975 FAX 011-881-9759

感 謝!

「充実した留萌大会を終えて」

留萌地方美術教育研究会 事務局長 **斉 藤 友 昭** (小平町立本郷小学校)

「感謝!」全道の造形連盟の会員の皆様。そして、関係 者の方々にこの言葉をまず言わせていただきます。

第48回全道造形教育研究大会の成就感・達成感に浸る間もなく、学校行事や研修などに追われている毎日ですが、大会当日を思い出すたびに、本当に「ありがとうございました。」という言葉が、何度も心の中で繰り返し出てきます。

全道大会に向けて、意欲的に取り組んできましたが、事務局のみの働きでは、到底このように盛会のうちに終わる大会はできませんでした。留美研の会員は、もちろんですが、全道に造形美術教育を志す先生方の、熱き思いが留萌に結集したことによって、実りある大会にできたと考えております。

お陰さまで、参加した諸先生より次のような声をいた だいております。

「授業や提言が大会主題・研究主題と関わって一本の筋が通っている。積み重ねの重さを感じた。」

「授業ガイドの事前配布には脱帽……。」

「ステージ構成や看板表示物など環境構成に留萌の温も りや真摯な姿が伝わってきた。」

参加者数についても、夏休み中の開催から2学期早々の 開催時期に変更したことなど参加者の受け止め方に多少 の不安を感じておりましたが、約350名という参加者を 数え、当初予定していた250名を100名ほど上回る盛況 となりました。

今だから話せることですが、私ども留萌は、観光地としてもビッグネームでありません。札幌や旭川のように多数の会員による多様な実践の数も多くありません。果たして全道の先生方が魅力を感じて、本当に来てくれるのだろうかという恐れが多分にありました。

しかし、蓋をあけてみると大きな杞憂でした。申し込みは初めは本当に少なく、各地区の委員の方に、再度呼び掛けをお願いしたりしました。しかし、夏休みが終わってからも、続々と申し込みがあり、逆に嬉しい悲鳴となっていきました。

お陰さまで、当初予定した大会要項も3度の増刷をしたり、何とか参加者の増加に対応する等、非常に忙しいが喜びの中で準備をすることができました。ただ、締切を過ぎても申し込みがあったり、当日も予想以上の参加者

があったりと、これらの対応は少々気を使いました。

締切を過ぎて申し込まれた先生方には、止むを得ない 事情があったと思われます。事務局としての、対応が良 かったのかどうか心配です。もし、対応が不満足と感じ た先生がおられたら本当に申し訳なく思っております。

ただ、多数の参加者のいる大会です。人数の確定は、やはり、確実にしなければならず。また、事前の準備期間に、ある程度の時間を要することを考えると事務局としては、お断わりするしかありませんでした。

今後の大会でも、このような事態が出てくると思われますので、大会を開催する事務局としては、この点も考えて運営に当たる必要があると痛感しました。

さて、今回の大会では、大会主題を「造形への誘い-悠-遊-優-留萌へ」、研究主題を「楽しさにひたり伸び やかに表す造形活動と共感し寄り添う指導」と設定しま した。

具体的には、

悠は、教師が紹介する題材や提案に基づいて、子供が 豊かに自分の経験や直感を働かせ「ゆったりと自己に浸 り」「悠々とイメージの世界に浸る」ことができるような 表現活動の楽しさを味わうための題材の選択や開発・提 案や提示の工夫。表現活動の楽しさを味わうための指導 計画や指導過程の工夫を課題としました。

遊は、子供自身が見つけた表現の思いや感じについて、その子らしい想像力を働かせ「色や材料や形と楽しく遊ぶ」「イメージの世界で楽しく遊ぶ」ことができるような、表現活動の楽しさを味わうための色や形・材料・イメージの世界と主体的にかかわり合う学習活動の工夫を課題としました。

優は、子供一人一人が自分らしい表現・自分らしい表現の思いを持ち、自分らしい表現方法で工夫していくように、その願いや方向を尊重しながら子供達が自ら表現を進めていくことを決して先回りしないで支えていけるような、表現活動の楽しさを味わうための支援を中心とした指導と評価の工夫を課題としました。

これらの課題が、7つの公開授業と各分科会での研究協議の中で、十分とはいかないまでも実りあるものになったでしょうか。参加された先生方にとって、意義あるものになったでしょうか。

参加者一人一人が大会参加後どのような感想を持った か図り知ることはできませんが、授業者や大会後に寄せ られた礼状の内容を幾つか紹介して、その答えに代えた いと思います。

留萌市立緑丘小学校 2年松組担任居 居 島 淳 子

私にとっては、初めての大きな研究会、授業が始まるまで不安と緊張の連続でした。私の緊張が伝わって、子供達まで緊張してしまったらどうしようと心配していましたが、いざ授業が始まって子供達の様子を見ていると不思議と気持ちが落ち着いてきて緊張は、どこかへいってしまいました。

「子供達が、自分の持っている力を発揮できるようにしなくては。」と思っていた私が、逆にいつも通りのびのびと活動する子供達に助けられたような気がします。

授業では、とても大きな活動に挑戦する子、色々な工夫を考えながら丁寧に活動する子、友達と協力しあって活動する子、どの子も自分のよさを発揮しながら楽しく活動できたことを大変嬉しく思っています。

あれこれ考えると、「こうすればよかった。ああすればよかった。」と色々出てきますが、今回皆さんに教えていただいた多くのことを、今後に生かしていきたいと思います。

どうもありがとうございました。



かもめ幼稚園 うめ組(5歳児)担任 宇佐見 弥 生

研究会の授業者としての体験は、この度が初めてでした。

このことが、普段何気なく行っていた私の保育活動の 細部を、改めて一つ一つ見つめ直し、考え直すきっかけ となりました。また、たくさんの先生方の観察の目にさ らされる緊張も、ひしひしと実感しましたが、サブとし て付いてくださった大澤先生のお陰もあって、気持ちに 余裕は残りました。

当日の子供達は、バスでの移動の時から設定保育の世界に入り込み、どの子の話を聞いても、それぞれにストーリーがあり、自分のつくった動物への愛情が感じられましたし、思い思いに感情移入して生き生きと活動す姿は、指導していて楽しいものでした。

意外な子が、とても大きなものをつくったり、素材に こだわって探していたりという一面に気付かされたこと も良かったと思います。

事前から当日、そして事後にわたって、多くの先生方からいただいた貴重なお話は、これからの私の保育に生かしていきたいと思います。



礼状から、「先日の留萌大会は、とても記憶に残る大会となりました。先生方の熱意、温かな会場校の雰囲気をして留萌の方々のやさしさ、どれもすばらしいものでした。こうした人たちの中で育つ子どもたちは、とても幸せだと思いました。どの子も先生を信頼し、作品づくりに夢中になっている姿に、その成果を見たような気がします。」(以下略)

もとより、私たち留萌地方美術教育研究会の会員のみで大会が無事終了したとは考えておりません。しかしこのような感想をいただいたことは、何物にも代えがたい最大の励ましとねぎらいとなりました。

運営面では、実行委員会として物足りない面や細かな 点での不手際があったと反省しておりますが、本当に有 り難いと思いました。

留萌大会では、当会の身の丈に合わせて授業数を絞り 込んだり、平日開催ということでこれまでと幾つか違う 面がありました。少人数の当会としては、精一杯の工夫 でした。参加された先生方、この点どう思われたでしょ うか。

とにもかくにも、事故もなく大会が終わったことを関係者の皆様に重ねて深く感謝申し上げます。

連盟報に寄せられた声いるいる

「海の町、留萌で得たもの」

歌志内市立西小学校

合 田 里 美

初めての参加であり、驚きと新鮮な気持ちであった。私の 提言に対しての、乗り越えるべき課題をご指導していただい たのが何よりの収穫であった。それは、子どもたちの表した いその時の心情などを大切にするということや、絵画指導を 通して一人一人がより美しいものを求め、いかにその子の情 操を高める機会とするかということである。子どもの活動を 認めつつ、素直に率直に子どもに向き合うことを忘れずにと いうアドバイスに、表現の自由を与えるかたわら、教師の一 人の人間としての審美眼が問われる。

実践によって子どもが変わっていく…大会で再認識した事は、「教えるべきもの」「思いのままを表現できる設定」などを吟味し題材としなければならない事。また「素材や材料の体験」「道具の体験」などの実践も、今の子どもたちにとって大変重要な機会である。

公開授業では留萌小学校3年生の「つくろう私たちの海」を 参観させていただいた。紙粘土をベースに一人一人がふくら ませたイメージの海の生き物を作っていた。

そこでは、子どもたちの今の気持ちが作品にぶつけられている様子と、作ったものを認めてほしいという気持ちが、子どもの手の動きや眼差しと声を通してひしひしと感じられた。それは子どもを教師としてではなく、横から見た傍観者であったために感じることのできた、子どもの素直な姿であったと思う。

大会がおわって留萌の海岸で海を眺めながら、潮風と共に 造形に対する視野が広がった清々しさを感じていた。



『留萌大会に参加して』

昨年の大会には都合で参加できなかったため久しぶりの造形 教育研究会の参加となりました。今回の研究会の参加では、自 分の普段の授業や自校の研究と比較しながら、現在、担任して いる低学年を中心として授業や分科会に参加させていただきま した。提言の途中で帰ることになりましたので内容がそぐわな い点もあるかもしれません。私の印象のままに書きたいと思い ます。

「はっぽうスチロールのへんしん」の授業は、子ども達が最後まで粘り強く活動していた点がよかったと思います。それぞれの感性での取り組みがありました。子ども達は、発砲スチロールを中心材料として、個人だけでなくグループでの活動しまあり、造形表現を楽しんでいました。ただ、残念だったのは、指導案を見ると児童観がほとんど無いということです。児童の実態から本時の支援や援助が生まれてくるはずです。きっと授業



『留萌大会はなんであったか』

僕だけの気持ちを連盟報に述べてもいいのだろうかと考え、ためらいながらも正直に感じたままを述べますことをお許し下さい。なんと言っても感銘したのは阿部宏行先生の提言。教師への檄ともいえる、心を揺さぶり高めるすばらしい内容であった。心の底から共感共鳴できる。自問自答ともいえる"美の伝道師"たる気持ちの高まり、張りつめた想いはとても気高い。この大会の願いを全て言い切っていると私には思えた。大会参加者教師と名のつく仕事人はこの問いにどう答えるか。教師の

釧路町立富原小学校 伊藤恵理

者の方にはあったでしょうが、授業を参観する私たちにとっては理解しがたいものでした。題材に寄せる子どもの興味や関心、中心材料の経験など事前にどんな把握があったかお聞きしたかったです。本校の研究は児童理解を中心の一つに据えて取り組んでいるから気になったのかもしれませんが。もう一点は、本時のねらいです。低学年は題材時間が2時間など短いものが多いです。2時間という時間に支援と評価をしなければなりません。本当に4観点の評価が可能でしょうか。本時の視点(重点)を絞り込む必要があったと思います。

提言については、増毛小学校の松田先生の造形遊びについてのしか、勉強になりました。先生の計画的な支援活動が、子ども達の生き生きとした自己表現につながっていたと思えたからです。授業を参観する視点が以前の私と違ってきたことにも気がつく貴重な時間でした。



北広島市大地太陽幼稚園 園長 坂 本 行 正

意欲や仕事の認識の違いや仕事の質への問でもあろうか。実際の学校現場の人と人との関わりの中に本当に美にめざめ、人への目覚め、共に心開き合って喜び合って夢見る喜びに慕っているだろうか。門外漢でよくわからないが、教えてやらせて点数をつけるだけの先生の仕事だったら、この落差は救い難い。仕事としての教師の本音たてまえが見え隠れした大会の二日でもあった。住み慣れた学校社会の構造の中に身を置く先生に美術伝道師としての使命感溢れる勇気づけはきっといつまでも続く。

『日本海・きらきら・留萌の子どもたち』

中標津町立中標津中学校

吉 村 由紀子

日本海を見るのは本当に久し振りだった。1日目の新川昭一 先生の素晴らしい講演が終わって、その日宿泊するはずのホ テルに向かう途中、道に迷ったついでに辿り着いたのが黄金 岬だった。まだ、夕日というには時間が早かったが、傾きか けた日の光に少し波立った海面がきらきらしていた。時間を 忘れるほど美しい、こんな自然の風景は、きっと留萌の子ど もたちの感性や想像力を育んでいるに違いないと思った。

今回の工藤先生の研究授業『イメージを誘う不思議な形』~ 想像の世界を表そう~や、金澤先生の『立体造形の広がり』~ イメージしたものを形にしよう~は、まさにそんな自然の中で育まれた留萌の子どもたちの感性や想像力をより高める題材であったと思う。中学生という時期は想像の世界の表現をすることにためらいを感じたり、苦手と感じたりする傾向にある。その中でためらわずにのびのびと表現活動する生徒たちの姿を見て、その裏にある指導者の、制作記録表を通した間接的な支援や自由な発想を促す全体の雰囲気づくりへの努力、個々へのたゆまざる支援を感じることができた。制作環境の整備、道具の準備、想像性をかきたてるありとあらゆる制作材料の準備にも本当に目を見張るものがあった。

自由な発想や想像にはそうしたきめ細かな指導者側の配慮が欠かせない。教職2年目の私には、まだまだできていないことがたくさんある。留萌大会は自分のできていないことに目を向けさせ、これからやらなければならないことを教えてくれた。なにかもやもやとした気持ちを一掃し、やる気を起こさせてくれるよい機会になったと思う。…来年はオホーツク海で朝日を見ようかな。



るもいは頭える

ダイナミックな造形活動に魅せられて

初山別村立初山別小学校

中 村 健太郎

新潟から北海道に来て2年目の今年、初めて全道造形研究大会に参加させていただきました。都合により2日目だけの参加でしたが、大会の熱気がひしひしと感じられ、大いに刺激的な研修でした。

私は、小学6年生の担任なので、「つくりたいものをつくる~よみがえれ!ガラクタたち」の授業を見させていただきました。教室いっぱいに完成寸前の作品が広げられ、最後の仕上げの段階の授業で、子どもたちの制作意欲があふれた空間となっていました。授業者の岡田加世子先生の優しさに満ちた支援に大変心を打たれ、図工教育の原点を教えていただきました。

その後の研究協議会においても、お二人の先生方から 報告があり、若い力を図工教育に注いでいる様子や、苦 労話などを率直に語っていただき、共感したり参考にな ったりで、大変勉強になりました

研究協議会の中で、貴重な発言がありました。特に、「子 どもの作品のよいところを見つけ褒めること、その子が 何を描きたいかをつかむこと…」などが心に残りました。 図工に対する姿勢を変える転機となる研修でした。

"感動"留萌大会

旭川市立雨紛中学校長

重 山 恵

第48回全道造形教育研究大会留萌大会が、多くの成果 を残して終了されたことに感激とともに、留萌の図工美 術に関係する情熱的な先生方に敬意を表します。

私は、本大会に参加をして、最初に感心したことは、大会主題のすばらしさであります。創造の原点「悠」・造形の原点「遊」・支援の原点「優」の三点をおさえた大会主題「造形への誘い-悠・遊・優-」は、今まさに変わろうとしている造形教育の在り方、方向性を示したものであり、誠に時宜を得たものであると思います。

そして、研究主題にそった公開授業がそれぞれ展開されており、子どもの生き生きとした活動を見させて戴きました。留萌の図工美術部の3年間の研究の積上げがの成果が花ひらいた大会ではないでしょうか。本当にご苦労さまでした。

さらに、新川昭一先生の「今、ニコニコ・ピチピチ・伸びやか・指導の喜びを」を演題にした講演は、美術教師のあり方のみならず、これからの教師のあり方を示唆したものとうけとめ、大変印象に残りました。

最後に、織田大会実行委員長様を始めとする実行委員の皆様には心暖まる大会運営をなされていたことに感謝を申し上げ、大会の感想と致します。大変ありがとうございました。

私の実践

『自分の足元を見直そう』

彫塑教材 (新しい発見を目指し)

日高教育研究連合会 図工部会会長 千葉錦 一

(新冠町立若園小学校長)

I はじめに

○新しい授業形態の創造という21世紀を指向した観点から、題材の選択や目標達成への指導の具体的方法やアプローチの仕方、授業展開等、図工分野での教師の意欲的な実践研究による成果は目覚ましい。それによる子どもたちの図工の授業に対する関心・興味の度合いが高まって来たことは大変好ましい。

しかし一方では、「楽しい授業」の展開を重視する余り、 教師自身が授業のねらいや本質を見失ったり、楽しい造 形活動のどこに学習の基礎基本を盛り込んでよいのやら、 楽しくなければ授業は失敗なのか等の率直な悩みを聞く ことも珍しくはなくなった。

○指導目標に沿って題材選択は容易なことだが、その 教材を子どもたちの実態に即して授業として組み立てを し、楽しさを実感できる「造形学習」へ導くとなると、教 材分析を初めとして事前の周到な準備、導入時のモチベー ション等相当の準備性が求められる。

○一口に図工の授業が好きと言っても、分野は多様性に富みその範囲も広い。根気が必要なもの、技術技巧を要するもの、準備に手間取るもの等集中力が授業を左右するような題材には抵抗感が強い。このため、傾向として子どもたちに受け入れられやすい授業を設定することから、色彩指導や技能技術面での小学校での指導は十分なのかという、批判にも似た疑問が中学校の美術担当教師からの声があるのも事実として見過ごせない。

○授業に臨む時の子どもたちの本当の願いは、「授業が楽しい」ことは勿論、むしろ「難しいけれど新しい発見をした。」「きつい授業だったけれど満足。」「また別のものにトライしたい。」というような充実感や満足感を実体験したいというのが本音ではないのだろうか。それを教師がいかに満たしてやるかという所に、目標に合致した授業の成否が存在していると思う。

個人会員募集

北海道造形教育連盟では近くに地区サークル等がなくて困っている方には個人会員になっていただけるようにしています。ともに学ぶ仲間として全道の仲間と交流を深めましょう。事務局へご連絡下さい。連盟報(広報誌)もお送り致します。

Ⅱ 題材について

○彫塑教材に限らず他の分野でもおおむねそうだが、準備や後始末を考えると粘土を使う授業は総じて敬遠されがちである。今回扱う紙粘土でさえ、授業を通して経験したことは極めて少ないと子どもたちは口々に言う。

学年としては、やや難易度は高いものの「紙粘土で自分の靴を造る」ことは勿論初挑戦。普段特別注意も払わず、汚れなくても使い古せばすぐ新しく買い替える現代の消耗品。"ちょっとだけ目をこらして自分の足元を見つめてみようじゃないか。" "何か新しい発見があるかも知れないよ。" そんな教師の素朴な問いかけに、子どもたちは素直に反応してくれた。

Ⅲ 本時のねらい

- (1) 制作体験を通して材質の特色や使い方の多様性を 知る。
- (2) 自分のイメージを生かして構想を練る力を養う。
- (3) 集中力をもって製作し心こめて最後まであきらめず取り組む。

IV 本時の展開

	児童の活動	教師の活動	留意点
導入	◎オリエンテーション・構想の練り上げ・発想やイメージの反復・ねらいの確かめ	◆材料の特質の周知徹底 ◆製作の手順を示す ◆成功へのキーポイント	◇粘土の粘り気強度 ◇修正の基本の徹底
展開	◎製作活動・実物を見て、それに自分の構想やイメージを加味しながら思い思いに自由に製作する。	◆粘土の分量の決定 ◆技術上の細かな指導 観点 ◆製作の手順をさらに 細かく ◆細部の表現は指先や 小道具を駆使して	◇各児童の進度を的確に 把握して効率とタイミ ングのよいアドバイス をする ◇粘土の乾燥加減の時間 ◇「きっとうまくできる よ」との支援を絶えず 送る
まとめ	◎授業への振り返り・自己評価と感想記入・次時へのステップ	◆授業分析結果と評価 ◆授業分析と評価	◇次時にいきるよう評価 項目の内容を精選

V 授業を終えて

○しばしば話題になるのは、"図工の授業での教師の話し方"である。授業の中では子どもたちは教師の問いかけに様々な反応を示す。教える側の教師はそれらを瞬時に何であるかを察知・判断して、的確な次への指示を与え、子どもたちを次へのステップへと導く。

作業中何げなく耳でキャッチする教師のアドバイスの 作品への影響力は大きい。そのタイミングと導き方、話 し方ひとつで、授業は思わぬ方向へ進むことが多い。

その要因は児童の実態、状況の把握不足と題材にかか わる事前の準備性の欠如に尽きると思われる。



授業後の反省でも同様 のことが言える。

「今日の授業はどうだった?」というような意図不明な問いかけは子どもたちに対して失礼である。より客観的・具体的な反省の視点を用意してやり、子どもたちの内面に隠れた様々な想いを引き出してやる工夫が必要

となってくる。このような考えに基づき、次時に生かせる「反省」の項目を設定してみた。

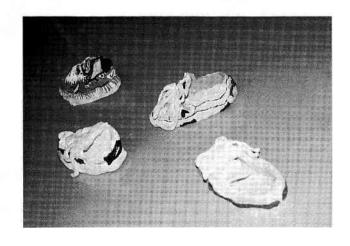
—— 評価反省項目 ——

- ①この授業で初めて知ったことは何ですか。
- ②上手にいった点、失敗した点は。
- ③紙粘土の扱いで困ったことは何ですか。
- ④新しく身についた技術は何ですか。
- ⑤製作中特に難しいと思った点は何ですか。
- ⑥手製の道具はうまく使えましたか。
- ⑦先生の説明は分かりやすかったですか。
- ⑧集中してきつい授業が終わった感想は。
- ⑨今後作ってみたいものは。
- ⑩授業者へ何でも一言。

VI 終わりに

○子どもたちの集中力・興味関心の持続。作品の出来 ばえ・学習の満足感が結果として得られるのかどうかと いう点で一つの試みにも似た授業であった。

完成した作品を見る限り、完成度も高く子どもたち自身も多いに満足のいくものとなった。子どもたちは、教師の授業をじっと見ている。そして、言葉にならない感性と心で反応している。それらが生き生きとした授業の中にさりげなく盛り込んでいくような創意と努力が図工教師には求められてくることであろう。



造形の力を集めて「人間回復宣言」

第48回留萌大会をふりかえって 一 研究部長 阿 部 宏 行

1. 日本一の夕日の街「留萌」

「日本一の夕日が留萌の自慢です。」という言葉を何度 も聞いた。自慢できる夕日があり、それを誇りに思う人 たちがいる。そのことが、何より素晴らしい。

そうして留萌で「夕日」を見ていると、日本一に見えてくるから不思議だ。子どもたちも、この夕日を「ふるさと」の誇りとして、自信に満ちた活動をしていた。

2. 「夢」をかなえる力

「夢」は子どもに力を与える。子どもは、人や自然とふれ合い、かかわりながら夢をかなえる力を蓄えていく。 時代をそのまま映す現代の子どもたちは、まるで「夢」 を持つことを避けるように、心を閉ざしはじめた。

「夢」は想像することと無縁ではない。想像する楽しさを忘れ、考えや問いを持たず、浮遊するように生きているとしたら、もはや人間としての尊厳もなくしてしまう。空白や闇を埋める力としての存在感溢れる「想像力」の回復のためにも、「手」でものをつくることを見直したい。

3. 「手」で考える

「手」でものをつくるというのは、単に手の巧緻性が高 まるのではない。「想像力」も鍛えられる。

「手で考える」ということは、ものを創り出す「時間」が保証されることである。この時間こそが人間の時間である。今の教育観や高度に発達したコンピュータやメディア時代においては、「瞬時なはやさ」がもてはやされるが、人間が自分の力で想像し創り上げる時間は、「人間そのもののはやさ」である。そこに感動や感性が存在する。

足もとの小さな花に目をやる時間やはやさは、人間の 感性を刺激する。これは人間誰もが備えている。 そして、感性は、人と人、ものと人とが共鳴しあって 高まり深まっていくのである。つまり、感性が感性を呼 び起こすのである。

4. 造形の力を集めて「人間回復宣言」

感性は人間に与えられた固有の財産である。この感性を、捨ててはならない。心の豊かさは人生の豊かさであり、人類すべての幸福の源である。身の回りに存在する全てのものと分かち合いながら人間の尊厳を守ることである。

美しいものにふれ、創り出す営みに心を砕き、人間としての尊厳を創り上げる造形のもとに全ての力を結集し「人間」を回復しよう。

5. 美術伝道師として、教室で発信を

大会で授業を参観し「教師が輝くと子どもも輝く」ということをつくづく感じた。教師と子どもとが、互いに補い高め合う姿である。これは「美術・図工」だからできたともいえる。しかし、大切なことは、留萌の授業から受け取った美術のよさを、もう一度自分の教室で、子どもたちと分かち合うことである。

「美術伝道師」としてアートすることの喜びを全ての子 どもたちに伝えたい。

6. 第49回オホーツク大会に心をつないで

私たちは留萌の地で〈いま〉〈ここ〉を共有した。そして、新たな〈わたし〉を発見することができた。

〈わたし〉は留萌の子どもたちと先生方に感謝しながら 札幌への帰路についた。

夕暮れ時、手稲山にかかる夕日を見ながら、この夕日 も日本一だと〈いま〉〈ここ〉で〈わたし〉は思った。

来年はオホーツクでどんな日本一を見せてくれるのだ ろう。今から楽しみだ。

〈いま〉〈ここ〉〈わたし〉を大切にしながら、心をオホー ックにつなげていきたい。

ついに開設! 連盟ホームページ

ホームページのアドレスは右のようになっていますので、インターネットに接続している方は、ぜひ一度アクセスしてみてください。

ホームページアドレス http://ha5.seikyou.ne.jp/home/hokuzou/ Eメールアドレス hokuzou@ma5.seikyou.ne.jp

あとがき

2001 年全国大会のスタートの年。留萌の発信が網走そして新しい主題のもとに函館・札幌へとつなぎます。 情報ネットワークを密にして全道の力で北の大地から未来を拓く全国大会をつくりあげましょう。 広報部(土肥 宏充, 東 尚典, 加藤 正幸, 小泉 誠, 小林 万咲彦, 山室 ゆかり, 富田 賢司, 中山 龍男, 毛馬内 國夫)